

「まちごめん」と ‘I’m so sorry’

—謝罪の日豪比較—

大橋 まり子

Maji gomen and ‘I’m so sorry’

— A comparison of Apologies by Japanese and Australians —

Mariko OHASHI

This paper compares apologies by Japanese and Australians. The data is based on the result of a Discourse Completion Test from 53 Japanese and 22 Australians. The result shows that Japanese apologies are influenced by *uchi soto* relation, on the other hand Australian apologies have no relation to social factors.

1. はじめに

本学では毎年オーストラリアの姉妹校から交換留学生を迎えているが、2006年度は23名の留学生が本学に2週間滞在した。滞在中、プログラムの一環として留学生は比較文化の講義に参加し、本学学生と共に授業を受ける機会があった。その際に実施したアンケートを基に日本語と英語の「謝罪」を比較するのが本稿の目的である¹⁾。

謝罪 (apology) とは、Goffmanによると自らに何らかの過失があって相手に迷惑をかけたり、不快感を与えたり、感情を害したことに對し、それを修復するための言語行動 (remedial work) であるとされる²⁾。また謝罪は発話行為の一種であり、フェイス³⁾を脅かす行為face-threatening act (FTA) のひとつとされている⁴⁾。謝罪を行うということは、聞き手のフェイス保持のために話し手のフェイスを脅かす行為であるといえる。例えば、大学の先生が学生に約束していたレポートの返却を忘れたという場合に、先生は謝罪を行うことで過失を認めたことになり、自分のフェイスを脅かすこと

なる。そして学生の傷ついたフェイスは先生の謝罪によって修復されることになる。そこでこのようなFTAを行う際には、FTAの効力を緩和するための何らかの手段が講じられるとされている。この例でいえば、「まだ途中なんだよ。明日でもいいかな」のように過失の事実を認めて、明日返す約束をするという方略を取るのもそのような手段のひとつである。

謝罪という行為はどの言語社会にも存在する行為であるが、その社会や言語により謝罪の仕方が異なる場合がある。例をあげると、2001年にハワイ沖で起きた日本の水産高校実習船と米原潜との悲劇的な衝突事故を巡って、日米間で「謝罪」論争が渦巻いたことは記憶に新しい。日本側は「土下座」してでも米原潜艦長が被害者に直接謝るべきだと主張した。また、今回交換留学生の1人が滞在中に日本人とオーストラリア人の行動違いに気づき、筆者にその違いを報告するということがあった。駅など公共の場所で人に衝突したり身体が触れた場合に日本人は何も言わないが、オーストラリアではそのような場合には相手に微笑んでSorry

というのが普通だという。

謝罪に関する研究はこれまで異文化コミュニケーションや比較文化語用論の分野での数多く報告されている⁵⁾。Coulmasには日本語では感謝の気持ちを表す場合にも「すみません」と謝罪の表現を使用するという報告がある⁶⁾。また、日本語と欧米の言語を比較した研究にはBarnlund & Yoshiokaや杉本による日本人とアメリカ人の謝罪の比較⁷⁾、三宅による日本人とイギリス人の謝罪の比較⁸⁾、Tanakaによる日本人とオーストラリア人の謝罪の比較が報告されている⁹⁾。井出は「すみません」の機能を7つに分類し、謝罪や感謝の機能の他に会話の潤滑油の働きもあると述べている¹⁰⁾。

本稿の目的は日本人学生とオーストラリアの学生の謝罪の言語行動を比較することにあるためCoulmasや三宅、井出で報告されている感謝の表現として使用する「すみません」は調査の対象に含めない。その理由は、日本語では感謝にも謝罪にも「すみません」を使用するが、英語の場合には感謝と謝罪は異なる発話行為として機能していることによる。本稿では発話行為としての謝罪(apology)のみを対象とし、調査方法として比較文化語用論の分野からBlum-Kulka, House & Kasperを使用する¹¹⁾。本稿の目的は次の3点である。

- 1) 日本人大学生と豪大学生の謝罪表現を比較し共通点と相違点を明らかにする
- 2) 謝罪の相手との親疎関係・上下関係が謝罪行為に与える影響を明らかにする
- 3) 謝罪のアンケートから日本人短大生の待遇表現の傾向を明らかにする

2. 調査方法

2.1 データ収集

調査は日本人短大生(J)とオーストラリア人大学生(AuE)を対象に2006年11月に実施し、J53, AuE 22の有効回答を得た¹²⁾。データは談話完成テスト(discourse completion test, 以下DCT)を用いて収集した。DCTとは発話行為の生じる場面を設定し、そのような場面で回答者がどのように発話をするか実際に話す通りに記述してもらう方法である。この方法は数種の言語間で謝罪、依頼、断りなどの発話行為を比較するのに有効であるとされる。本研究では英語版と日本語版の2通りのDCTを作成した。英語版DCTはBlum-Kulka, House & KasperらがCross-Cultural Pragmaticsで用いたDCTを参考に作成し、日本語版DCTはBlum-Kulka et alに基づく平賀を使用した¹³⁾。その内容は日本語と英語が等しく対応するよう留意し、それぞれの社会文化的、語用論的に適切な表現に置き換えられたものである。以下に日本語版DCTの例をあげる。

〈例〉

ある学生が先生から本を借りたのですが、その本を返すことになっていた日に、持ってくるのを忘れてしまいました。

学生：.....

先生：あ、そうですか。わかりました。

表1 談話完成テストの場面

場面1	大学の先生がその日に返すのを約束していたレポートを読み終えることができなかった(レポート).
場面2	学生が先生から借りた本を、返すことになっていた日に持ってくるのを忘れた(本).
場面3	人事担当課長が急な会議で呼び出されたため、その日面接することになっていた学生を30分待たせてしまった(面接).
場面4	高級レストランのウエイターが、ステーキを注文したお客にフライドチキンを運んできた(レストラン).
場面5	遅刻の常習犯として有名な学生と一緒に勉強をする友達との待ち合わせにまた遅れてきた(遅刻).
場面6	駐車場で車をバックさせているときに誤って人の車にぶつけてしまった(車).
場面7	仕事の会議で同僚の感情を傷つけるようなことを言ってしまった. 会議の後、その同僚がそのことに触れてきた(侮辱).
場面8	満員のバスの網棚においたあなたのバッグが、バスが急ブレーキをかけはらずみで他の乗客の上に落ちてきた(バス).

表2 謝罪場面の社会変数

謝罪場面	社会的距離	力関係
1. レポート	親	上
2. 本	親	下
3. 面接	疎	上
4. レストラン	疎	下
5. 遅刻	親	同等
6. 車	疎	同等
7. 侮辱	親	同等
8. バス	疎	同等

アンケートでは8つの謝罪場面を設定した。それぞれの場面は表1のとおりである。各場面において話し手と聞き手の関係が近い場合(親)と遠い場合(疎)、また両者の社会的・心理的ステイタスを上、同等、下に設定した。ただしこれらの社会変数はDCTには明記していない。各場面の社会変数を表2に示す。

2.2 分析方法

分析はBlum-Kulka et al.によるCross-Cultural

Speech Act Realization Project¹⁴⁾のコーディング・マニュアルに従って行った。謝罪の発話行為は主に直接謝罪行為(Ilocutionary Force Indicating Device 以下, IFID), 責任の所在への言及, 原因の説明や言訳, 弁償の提案, 繰り返さないという5つのストラテジーから成るとされる。さらに, 謝罪の効力を強調するための言語的手段や過失の程度軽減するための緩和策が講じられる。例えば「先生すみません。先日お借りした本を今日忘れてしまいました。明日必ず持ってきます」という場合, 「すみません」というのは直接謝罪行為, 「先日お借りした本を今日忘れてしまいました」は責任の言及, 「明日かならず持ってきます」は弁償の提案である。また「先生」は呼びかけとして分類した。

3. 分析結果

3.1 ストラテジーの発現頻度

まず, ここでは謝罪のストラテジー発現頻度の分析結果について述べる。図1は日本語と英語の謝罪の全場面の発現回数を集計しストラテジー別に頻度で表わしたものである。日本語話者53名による8場面の累計424回答と英語話者22名8場面の累計176回答を対象として分析した。

図1 謝罪ストラテジーの比較

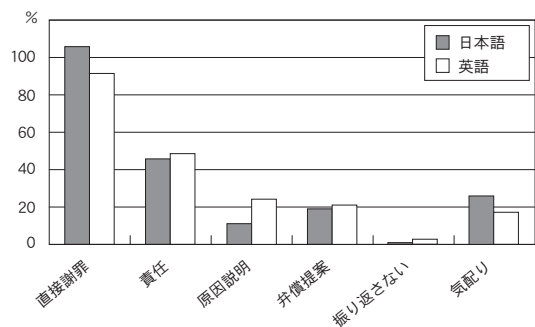


表3 場面別ストラテジーの発現頻度 (%)

	直接謝罪表現		責任への言及		原因の説明		弁償の提案		気配り	
	J	AuE	J	AuE	J	AuE	J	AuE	J	AuE
レポート	94	77	94	82	17	45	4	18	0	0
本	92	114	90	82	2	9	34	45	0	0
面接	92	100	15	23	55	82	0	0	70	5
レストラン	109	114	2	18	0	0	98	91	4	0
遅刻	119	86	43	41	15	59	0	0	6	0
車	119	86	21	50	4	0	17	14	32	41
侮辱	120	73	87	86	4	0	0	0	0	0
網棚	100	86	11	14	0	0	0	0	97	91

N: J=53 AuE=22

図1から日本語話者、英語話者ともに直接謝罪行為 (IFID)、責任への言及、過失原因の説明、弁償の提案、繰り返さないの5種類のストラテジーと気配り表現を組み合わせて謝罪表現をしていることが分かる。直接謝罪行為 (「すみません」 I'm sorryなど定型表現) は日本語で106%、英語92%と共に高い頻度で使用されている。日本語の場合は100%を超える頻度となっているが、それは、「ごめん。そこまでいうつもりじゃなかったのだけど つい... 申し訳ない」とある場合には「ごめん」と「申し訳ない」を2回としたことによる。このように表現を変えて複数回重ねて謝罪を述べる例は英語にも見られた。例えば、*Please forgive my lateness. I got called into a meeting I didn't know was on. Sorry.*の場合、斜字体で示した 'Please forgive my lateness' と 'Sorry' はいずれも直接謝罪行為としてカウントした。ただし「ごめんごめん」「わりいわりい」など日本語の畳句表現は1回として累計した。

つづいて「過失責任への言及」ストラテジーは日本語46%、英語49%が使用し、またその頻度は少ないものの謝罪原因の説明 (J:12%, AuE:24%), 弁償の提案 (J:19%, AuE:21%), 過失を

繰り返さない (J:1%, AuE:3%) や気配りの表現 (J:28%, AuE:17%) を使用している。

次に、日本語と英語のストラテジー使用頻度を比較すると、その頻度にいずれも20%以上の差はなく、謝罪行為を行う際のストラテジー選択において両言語はかなり類似したものとなっている。この結果はOlshtain & Cohenの結果とも一致する¹⁵⁾。Olshtain & Cohenは英語、フランス語、ドイツ語、ヘブライ語で謝罪行為の比較を行ったが、4言語間の使用傾向にそれほど差異は認められず、むしろ類似点が多いと報告している。その理由として彼らはCCSARPの調査方法をあげ、学生の大学生活を中心とした場面設定が文化間で比較的類似していることにあるとしている。

3.2 謝罪ストラテジーの場面別比較

ここでは調査結果を場面別に分析し、謝罪の相手との親疎関係、力関係、過失の程度が謝罪表現に及ぼす影響について考察する。

直接謝罪行為の使用頻度をみると、表3から日本語ではほぼ全場面で「すみません」「ごめんなさい」など謝罪の定型表現を使用していることがわかる。英語の結果からも同じく高い頻度でI'm

sorryなど定型表現を使用しているが、レポート(77%)と侮辱(73%)の場面ではその頻度は若干低くなっている。「先生が学生にレポートを返すのを忘れた」というレポートの場面、つまりステータスが上から下の者に対する謝罪場面では直接謝罪表現を使用するよりも過失を認めた上でI’ve been really sickと原因を説明したり、I will return it as soon as possibleと速やかな対応を約束することで関係修復を図ろうとしている。ここに例をあげる。

No, I’ve been really sick and haven’t had a chance to read it. (レポート)

No, not yet. I will return it as soon as possible. (レポート)

また、「会議の席で同僚の感情を傷つけるようなことを言った」という侮辱の場面では、直接謝罪のストラテジーを使用しない代わりにI didn’t mean to offend youと故意の否定、そしてIt is a general reminderと自分を正当化しているのがわかる。またI’m sorryと謝罪する場合にも、「もし傷つけてしまったのだったら」と条件をつけた上で謝罪をしている。

I didn’t mean to offend you. It is a general reminder. (侮辱)

I said what I thought and gave my opinion. I didn’t mean to offend you. (侮辱)

I’m sorry if I’ve offended you. (侮辱)

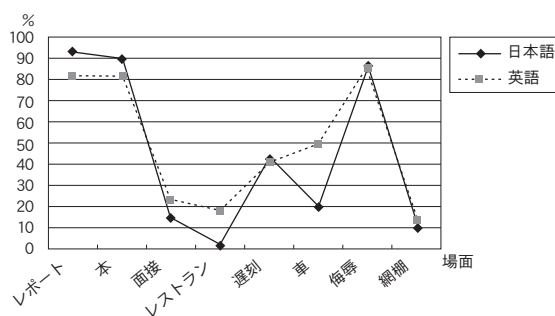
平等で対等な関係に価値を置く英語圏の文化では活発な議論は日常のことであり、そこでは率直な意見の交換が行われる。そのような場において意見の対立は当然のことであり、むしろ重要な価値が置かれている。この場面でも、I said what I

thought and gave my opinionと自分の意見を言ったただけだという回答が多くみられた。

一方、対人関係において調和に重きを置く日本の社会では対立は好まれない。もし調和を乱すということがあれば極力修復に努める。そこで、この場面のように会議の場の発言で相手を傷つけてしまった場合には、まず謝罪を表明しそのような意図はなかったと釈明するであろう。

アメリカ人と日本人の謝罪を比較したBarnlund & Yoshiokaは、自尊心(self-esteem)と自己決定(self-determination)に価値をおく欧米の文化では過失を自ら認めることに彼らは苦痛を覚えるとしている¹⁶⁾。謝罪という行為は自分の過失を認識することであり彼らは潔しとしない。そのため直接的な謝罪表現よりも、責任への言及や原因の説明をすることで間接的に謝罪を行う傾向がある。

図2 責任への言及



次に責任への言及ストラテジー使用頻度を場面別に比較する。図2は日本語と英語の場面別の頻度を示したものである。日本語、英語ともレポート(J:94%, AuE:82%),本(J:90%, AuE:82%),侮辱(J:87%, AuE:86%)の場面では高頻度で責任への言及がされている。反対に面接、レストランと網棚の場面では責任への言及はほとんどなされていない。

ここでストラテジー選択と親疎関係や力関係と

の相関関係を考察すると、まず日本語の場合、親疎関係とストラテジーの選択に相関関係が認められた。表2と図2から、レポート、本、遅刻、侮辱の場面は謝罪の行為者と相手が親しい関係に設定されているが、レポート、本、侮辱の場面ではそれぞれ高い頻度で責任への言及がなされている。また遅刻の場面では約半数が責任の所在に言及している。一方、面接、レストラン、車、網棚の場面では両者は疎遠な関係にある。これら4場面では責任の所在は言及されず、代わりに面接、車、網棚の場面では相手への気配りを表し、レストランの場面では弁償の提案が選択されている。

ここから相手との関係に敏感に反応している日本人の姿を窺い知れることができる。日本の文化ではウチとソトがその人間関係に大きく作用していると言われている¹⁷⁾。中山はウチ・ソトの概念にヨソを加えて説明しているが、夫婦、親子、兄弟といった密接な関係をウチ、無関係な他人をヨソ、学校や職場、近隣の人々といったウチとヨソの中間的・両義的な性格を持つ人をソトとしている¹⁸⁾。さらに中山はソトの人々とコミュニケーションをする場合に過剰配慮が最大になり、ウチやヨソに対してそれは弱まり、時には消えてしまうとしている。

そこで表1の場面設定をウチ・ソト・ヨソの概念で捉え直して見ると、その場限りの関係である「面接」、「レストラン」、「車」、「網棚」の場面はヨソ、先生と学生という関係から「レポート」「本」はソト、また同僚という間柄から「侮辱」の場面もソト、そして大学生の年頃では友達がもっともウチ集団に属する関係であろう。そのように見るとソトの相手に対しては自分の責任を認めるが、ヨソの相手には責任への言及はしないという傾向が顕著に見えてくる¹⁹⁾。ヨソ関係の相手には「すみません」「申し訳ございません」など定型表現に加えて弁償の提案（レストラン）や気配り（面接・

車・網棚）がなされるが、その表現に注目すると、「すぐお取替えいたします。少々お待ちいただけますか」（レストラン）、「お待たせしました」（面接）、「お怪我はございませんか」（車・網棚）と総じて似たような表現である。このような慣用表現は日本語には数多くあり、日本社会では状況に合わせて適切な慣用表現を使用することが期待されている。

図2から、英語の結果においても責任への所在と社会変数の関係には、日本語の場合と類似したパターンが現れていて、親しい関係にあるレポート、本、遅刻、侮辱の場面ではいずれも責任の所在について言及される比率が高い。

しかし両者が疎遠な関係にある面接、車、レストラン、網棚の場面を見ると、日本語とは異なるストラテジーを使用していることが分かった。表3からこれらの場面で日本語では気配りや弁償の提案がなされているが、英語では過失の原因を説明していることが分かる。面接の場面では82%が学生を待たせた原因を説明し、遅刻の場面では59%が友人に遅刻の原因を説明している。英語で謝罪をする場合、責任について言及することに並び過失原因について説明をすることは非常に重要なストラテジーであるされ²⁰⁾、事実には違反しない限り言い訳や説明をすることが容認もしくは奨励される²¹⁾。しかし日本では、謝罪の際にくどくどと説明をすることは弁解がましく聞こえて反感を買うことがある。筆者の経験でも、遅刻をしたアメリカ人教師が上司に執拗に理由を述べるばかりで全く謝罪をしようとしなかったために上司の機嫌を損ねてしまったという場面に度々遭遇した。

ここに「面接」と「遅刻」の場面から例を上げる。

I'm sorry, that was an urgent meeting that couldn't be postponed. (面接)

Am so sorry to keep you waiting for so long I

was called for an emergency meeting. (面接)
I’m sorry. I’m late. I set my alarm but it didn’t go off. (遅刻)
Oops! I had to do some chore for my mum. It wasn’t my fault. (遅刻)

次にレストランの場面をみると、責任の所在への言及は殆どなされず(18%), 91%の回答者が弁償の提案をしている。その理由としてOlshtain & Cohenはウェイターが注文を間違えたことを認めると失職の恐れがあるため自分の責任について言及をすることはないと説明する²²⁾。本調査もOlshtain & Cohenを支持する結果となった。ここに「レストラン」の場面から例をあげる。

I am terribly sorry there must have been a mixed up. I will fix it up now and you can have coffees on the house. (レストラン)

以上場面別に謝罪ストラテジーの選択パターンを見てきたが、まとめると1) ストラテジーの選択頻度に日本語と英語のそれほど違いはなく日本語でも英語でも直接謝罪行為が全ての場面で使用される。2)日本語では、ウチ・ソト・ヨソの関係が謝罪の仕方に影響し、ソト関係の相手には直接謝罪と責任の所在への言及がなされるが、ヨソ関係の相手に対し、責任への言及はなされず、謝罪の直接表現と気配りや弁償の提案がなされる。3) 英語では、直接者謝罪に加えて、責任への言及や原因の説明がなされる。次節では、DCTの内容を分析する。

3.3 内容分析

ここではDCTに記述された英語と日本語の内容を詳しく検討していきたい。第一には、ストラテジーによる分析だけでは見えてこない日本語の強

調表現に注目し、第二に面接の場面から日本語と英語の表現の違いについて考える。

日本人の謝罪にはウチ・ソト・ヨソの関係が影響していることは前節で述べた。ヨソの相手には「大変申し訳ございません」「お待たせしました」「少々お待ちいただけますか」など定型表現を使用して礼儀正しさを表明しようとするが、その一方ウチ関係にある友人には仲間内だけで通じ合えるウチことばを使用し親密度を高めている様子が観察された。ここに友人に対して謝罪をするという場面5から例をあげる。

マジでごめん！ (J1)

ごめんごめん!!本当にごめん!!まったよね？ (J4)

ごめーん!!また寝坊しちゃった、まじごめん!!

(J13)

ごめんごめん。まーちごめんね (J17)

まちごめーん!! (J19)

わりィわりィ遅くなった。(J39)

わりい！わりい！ (J54)

まちごめん。又、遅刻しちゃった。何かおごるヨ。

(J55)

まじごめんねえ…。 (J62)

ここにはあげたのは一部であるが、場面5の記述にはほとんど全て上例と似通った表現が見られた。特徴を分析すると、ひとつに「すみません」「申し訳ありません」など丁寧度の高いスタイルよりも「ごめんなさい」「悪い」を使うこと、そして「ごめなさい」よりも「ごめん」と短い表現を好む傾向があげられる。次に「ごめんごめん」「わりいわりい」と重ねることで謝罪の気持ちの強調しようとしている。さらに特徴的なのは、「まじごめん」という表現であろう。謝罪表現(すみません、申し訳ありません、ごめんなさい)を強調する方略として他の場面では「本当に」や「大変」が使わ

れているが、「まじ」は場面 5 のみで観察された。その表記には「まじ」「まち」「まーち」「マジ」と表現にバリエーションがみられた。

ウチ関係では、丁寧な長い表現よりも短い表現が好まれる。また長々と弁解がましいことは言わない。そして誠意を表現する手段として同じことばを重ねたり、「まじ」を使うことで親近感を高めウチ関係を強調する。丁寧な表現はよそよそしく感じられ、反対に距離感を演出することになるためウチ関係では使われない。

第 2 に場面 4 から日本語と英語の表現を比較する。この場面は人事課長が面接にきた学生を待たせてしまったという状況であるが、日本語では「お待たせしてすみません」「大変お待たせしました。申し訳ありません」と待たせたことを詫げる表現をしているが、英語の回答には Sorry という表現もあるものの、合わせて Thank you for staying とポジティブな面を強調する回答がみられた。ここに同じ場面においても、その捉え方に文化の違いが現れているといえる。

Thank you for staying. (AuE18)

Thank you for being so patient. (AuE21)

Sorry to have kept you waiting. (AuE16)

4. 考察

前節で日本語と英語による謝罪の DCT の分析結果について述べた。その結果は次のとおりである。

- 1) 謝罪を遂行する場合、日本語、英語ともに謝罪の定型表現、責任への言及、原因の説明、弁償の提案、過失の繰り返しをしない、気配りのストラテジーを使用する
- 2) 日本語と英語のストラテジーの使用頻度にそ

れほど顕著な差は見られず、その傾向は類似している

- 3) 日本語ではウチ・ソト・ヨソの関係が謝罪の仕方に影響を及ぼす
- 4) 英語の謝罪では定型表現に加えて責任の所在への言及と原因の説明がされるが、日本語で原因の説明はあまりなされない

結果から、全ストラテジーの選択パターンに日本と英語に大きな相違はみられなかったが、場面別の分析結果からは日本語と英語の謝罪の仕方に違いがみられた。

日本語版 DCT の分析結果からはウチ・ソト・ヨソという日本社会の人間関係の特性が謝罪の仕方にも影響を及ぼしていることが分かった。ソト関係にある人（先生、同僚）には、謝罪の定型表現に加えて、過失の責任を認めたり（本を忘れました）、故意の否定をしたり（そんなつもりじゃなかった）、「明日でも大丈夫」と気遣いをしていることが分かった。特に会議で同僚を傷つける発言をしてしまったという侮辱の場面では、謝罪の定型表現を複数回使用し、「そんなつもりじゃなかったのについ...」とことばを言い切らずに語尾を濁すなどの手段を用いて関係修復に努めようとしていくことが分かった。

先にも述べたが日本では調和が対人関係で最大の価値をおかれている。調和を保つことが最も重要であり、もし相手を傷つけるような行為でその場の調和を乱すようなことが生じると修復に最大限の努力が払われる。このような配慮はソトの関係において最大になるとされる。三宅は、日本人が対人的に最も注意を払い、言語表現にも気を配る相手は、ソト関係の人間に対してであるという²³⁾。

ヨソ関係にある相手（面接・レストラン・車・網棚）には弁償の提案をしたり、「お怪我はありませんか」と気配りがなされる。これらの場面では、

状況に合わせた定型表現を用いることで礼儀正しいイメージが創出されている。しかし丁寧ではあるが定型表現だけの紋切り型の謝り方は誠実味に欠ける嫌いがある²⁴⁾。これはヨソ関係の人に対しては過度にいてねいな言動がみられたり、反対にぞんざいな言動がみられるという三宅の指摘にも合致している²⁵⁾。

そして、ウチ関係にある遅刻の場面では、「ごめん」と謝罪の表現は短く簡潔であるが、「まちごめん」と仲間内で使うウチことばを用いることで謝罪の気持を強調し誠意を示そうとしている。このウチ関係の相手に対し、彼らは表面的ではなく本心からの謝罪をしている様子がかがえる。

さて、駅など公共の場所で他人に身体が触れても日本人は謝らないという留学生の観察を先に紹介したが、この観察もウチ・ソト・ヨソの概念からみると説明が可能である。無関係な他人であるソヨ関係の大衆に対してはその存在を全く無視しているため、ぶつかることがあっても知らぬ振りをしているのである。この留学生の観察は大変示唆に富むものであるといえよう。

次に、英語の場面別分析結果から英語話者は謝罪の定型表現 (I’m sorry など) に加え責任の所在へ言及や過失原因の説明がなされることが分かった。欧米社会では自己表現や自発性に価値が置かれ²⁶⁾、誠意 (sincere) を持って謝ることが最も肝要とされる²⁷⁾。そのため責任の所在を明確にして自分の行為を説明することが求められるのである。

ことばにはその言語の話されている社会や文化の価値観、規範、志向性が反映されている。ホフステードは文化を「たまねぎ型モデル」を使って説明している。それによるとそれぞれの文化の「芯」であるところの価値観は通常見ることができないが、慣行 (practice) を通して異文化の人にも見ることができると理解することはできないとする²⁸⁾。ここで謝罪の言語行為をホフステードのいう

慣行と見なすと、謝罪という行為からその文化の価値観が見えてくる。また、ことばの使われ方と日本人の文化・社会の志向性を論じる三宅は私たちの周辺の一見現代的で皮相的な現象のなかにも、歴史のなかで積み重ねられた日本社会の規範や志向性が見え隠れするとしている²⁹⁾。本稿では日本語と英語の謝罪行動を見てきたが、そこに日本文化や英語圏文化の価値観や規範を窺い知ることができた。このように比較をすることで自分の所属する文化とは異なる価値観や規範を知り、認識することが可能となる。そして価値観の違いを認識することは異文化とのコミュニケーションを行う上で大変に重要であると考ええる。

5 おわりに

今世紀に入り国際化、グローバル化の速度はますます加速している感がある。このような時代には日本においても異文化出身の人々と仕事や勉学を共にする機会が増している。そこで文化背景の異なる人と共生するには価値観の多様性に対する寛容な心や態度が必要となってくる。自文化の価値観や規範で他者の行動を判断すると、ステレオタイプを抱いたり、時には思わぬ誤解が生じることもある。

本稿では日本語と英語の謝罪を比較し、その言語行為の背後にある文化の価値観や規範を多少なりとも炙り出すことができた。このような比較研究の成果から得られる知見は異文化理解に貢献できると信じる。単なる印象から「外国人は自己主張が強い」などステレオタイプを抱いてしまうことがあるが、行動の背後にある価値観の違いを認識することでこのようなステレオタイプも払拭することができよう。

本調査は調査対象者の数も限られたものであり

方法論においても限界がある。また、今回使用した発話行為理論にもとづく分析方法は西欧の言語を対象とした分析方法であり、日本語表現を分析するには課題が残ることとなった。これらの点は今後の課題としたい。

註

- 1) 今回、貴重な機会を設けて下さった湘北短期大学学友会国際交流委員会とグローバルコミュニケーションセンター長の黒崎真由美教授に感謝の意を表したい。またアンケートに協力して下さい。このアンケートは学生のプロジェクトのためのデータとして収集されたものである。本稿でも同じデータを用いるが、コーディングおよび分析は著者自身が行った。
- 2) Goffman 1971
- 3) Goffmanのfaceの概念をBrown & Levinsonが援用したものである。フェイスとは全ての個人が持つ自分の値打ちとか像(イメージ)についての感じ方として理解されている。フェイスには他人に好かれたい、認められたい、尊敬されたい評価されたいといったポジティブ・フェイスと他の人から邪魔されたくない、押さえつけられたくないといったネガティブ・フェイスの2種類があるとされる。
- 4) Brown and Levinson 1987
- 5) Coulmas 1981, Tanaka 1988, Blum-Kulka, House & Kasper 1989, Olshtain & Cohen 1989, Barnlund & Yoshioka 1990, 三宅 1994, 平賀 1996, 杉本 1997, 井出 2005他
- 6) Coulmas 1981
- 7) Barnlund & Yoshioka 1990, 杉本 1997
- 8) 三宅 1994
- 9) Tanaka 1988
- 10) 井出 2005
- 11) Blum-Kulka, House & Kasper 1989
- 12) 日本語の調査は湘北短期大学総合ビジネス学科2年生を対象に、英語の調査はThe University of New CastleとAustralian Catholic Universityからの交換留学生を対象に実施した。それぞれの学生に口頭でデータの使用目的を説明し許可を得ている。
英語の調査では回答者の国籍(nationality)と母語(native language)についても調査した。その結果、国籍についてはオーストラリア20名、フィリピン/ス

ペイン/ハワイ1名、オーストラリア/イタリア1名である。また母語については英語(English)20名、中国語1名、英語/フィリピン語1名である。

- 13) 平賀 1996
- 14) Blum-Kulka et al. 1989
- 15) Olshtain & Cohen 1989
- 16) Barnlund & Yoshioka 1990 p.204
- 17) 中根 1967, 中山 1989, 三宅 1994, Bachnik & Quinn 1994, 牧野 1996他
- 18) 中山 1989
- 19) 三宅1994や平賀1996もウチ・ソトの概念で謝罪/詫びの言語行動を分析している。本稿は平賀とはウチ・ソトの捉え方が異なっている。
- 20) Barnlund & Yoshikawaでもアメリカ人は「謝罪を述べる」の次に「説明をする」との回答率が高い1990. p.201。日豪の謝罪を調査したTanakaもオーストラリア英語では謝罪原因を説明すると報告している1991。
- 21) 杉本 1997 p.105
- 22) Olshtain & Cohen 1989 pp.168-169
- 23) 三宅 1994 p.143
- 24) 杉本 1997 p.105
- 25) 三宅 1994 pp.143-44
- 26) Barnlund & Yoshioka 1990 p.204
- 27) 杉本 1997 p.104
- 28) ホフステード1995 pp.7-8
- 29) 三宅 2002 pp.8-9

参考文献

- 1) Brown, P. & Levinson, S. Politeness : Some Universals in Language Usage Cambridge University Press 1987
- 2) Bachnik, J. M. and Quinn, Charles J. Jr. Eds. Situated Meaning Inside and Outside in Japanese Self, Society, and Language. Princeton University Press 1994
- 3) Barnlund, D. C., & Yoshioka, M. Apologies : Japanese and American Styles. International Journal of Intercultural Relations, 14, 193-206 1990
- 4) Blum-Kulka, S., House, J. & Kasper, G. Cross-Cultural Pragmatics : Requests and Apologies Ablex 1989
- 5) Coulmas, F. Poison to Your Soul : Thanks and Apologies Contrastively Viewed. In F. Coulmas.

- Ed. Conversational Routine : Explanations in Standardized Communication Situations and Prepatterned Speech. Mouton. 69-91. 1981
- 6) Goffman, E. Relations in Public. Microstudies of the Public Order Penguin 1971
 - 7) 平賀正子 ことばと行為 宍戸・平賀・西川・菅原編 表現と理解のことば学 7-25 ミネルヴァ書房 1996
 - 8) ホフステード、G. 多文化世界 有斐閣 1995
 - 9) 井出里咲子 スモールトークとあいさつ—会話の潤滑油を超えて 井出・平賀編 異文化とコミュニケーション 198-215 ひつじ書房 2005
 - 10) 三宅和子 『詫び』以外で使われる詫びの表現 日本語教育 82号 日本語教育学会 1994
 - 11) 三宅和子 ことばに現れる日本文化の志向性 日本文学文化 第2号 8-14 東洋大学文学文化学科研究室 2002
 - 12) 中山 治 「はかし」の心理 創元社 1988
 - 13) 中根千枝 タテ社会の人間関係 講談社 1967
 - 14) Olshtain, E. & Cohen, A. D. Apologies across Languages. In S. Bulm-Kulka, J. House & G. Kasper Eds. Cross-Cultural Pragmatics : Requests and Apologies 155-173 Ablex 1989
 - 15) 杉本なおみ 謝り方の日米比較研究—問題点と今後の課題 異文化コミュニケーション No.1 異文化コミュニケーション学会編 103-120 1997
 - 16) Tanaka, N. An Investigation of Apology : Japanese in Comparison with Australian. 明海大学外国語学部論集 4 35-53 1991